

派遣者番号	30J02	氏 名	山川 研
研究主題 —副主題—	読みの交流の様相 —高等学校国語科における実践分析—		
派遣先	東京学芸大学 大学院	担当教官	細川 太輔
所属	都立足立西高等学校	所属長	加藤 泰弘

キーワード： 読みの交流 テキストマイニング 読みの方略

1 研究の背景 (目的)・主題設定の理由等

新学習指導要領では、学力の3要素が「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に整理され、国語科では、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」のそれぞれの領域によって育成すべき資質・能力が明確に示された。このことから「読むこと」の指導は、従来の教授型による指導からアクティブ・ラーニングを軸とした学習者主体の指導へと質的に転換する必要がある。本研究は、「聞くこと・話すこと」、「書くこと」との関連性を踏まえ、教材の特性を活かした「読む」能力を育成する指導について研究し、その成果を広め、東京都の教育に貢献するものである。

「読むこと」における指導では、読みの交流を主軸に据えた学習活動の重要性が指摘されている。このことは、「教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向」(H28 中央教育審議会答申)を改善する一つの方向性を示していると考えられる。読みの交流は、学習者が自身の読みを他者と交流させることにより、認知的変容としての解釈の変容、メタ認知的変容としての読みの方略の獲得・変容によって、自立した読み手を目指して自身の読む力を育ていく主体的な言語活動に他ならない。

読みの交流の場において、学習者の読みがどのように形成され、共有・交流されていくのかを、具体的な実践場面を対象として調査し、分析を通して明らかにする必要がある。

2 研究の内容・研究の方法

【研究の内容】

本研究では、高等学校国語科における「読むこと」の読みの交流の学習活動を対象とする。読みの交流の場において、認知的変容としての解釈の変容、メタ認知的変容としての読みの方略の獲得・変容に焦点を絞り、その様相を記述する。

【研究の方法】

第一に、読みの交流を対象とした先行研究について文献による調査を行い、読みの交流の理論的背景を整理する。

第二に、高等学校国語科における「読むこと」の学習活動に読みの交流を導入した実践を行い、その実践における読みの交流の様相について、特に問いの性質と読みの方略の使用に注目して記述する。

第三に、読みの交流の成否に関わるメタ認知的変容としての読みの方略の獲得・変容を把握するために、学習者が用いる読みの方略について質問紙によるアンケート調査を行い、読みの方略の使用実態を明らかにする。

第四に、具体的なテキストを対象として問いの性質を異にする学習課題について、読みの交流の様相を記述するとともに、読みの方略の獲得・変容の過程を第三の手続きによる読みの方略の使用実態と対照しながら明らかにする。

本研究では、量的分析については R Version 3.5.2(2018-12-20)、計量テキスト分析については KH Coder (Ver. 3. Alpha. 15g)、トランスクリプトの質的分析については質的三層分析(松本修、2006)を主な分析手法として用いた。

3 研究の結果

読みの交流を対象とした先行研究の調査の結果は次のとおりである。①読みの交流学習活動の全体は、形態としては「個人」→「グループ」→「全体」の流れを基本として構成される。②ワークシートは認知的変容としての解釈の変容と、メタ認知的変容としての読みの方略の獲得・変容の過程を、学習者が可視化できるようにする工夫が必要である。③学習課題としての問いは、テキストと読み手、読み手と読み手、読み手と教師との対話を促すものが有効である。

実践調査Ⅰでは、文献による調査結果を踏まえ、読みの交流学習活動の様相について、特に問いの性質による交流の差異を明らかにすることを目的とした。その結果、問いの性質のうち、「テキストの叙述に基づいた表象化に関する〈対話〉を促す側面から検討した問い」、「テキストの内的構造に関わる〈対話〉を促す側面から検討した問い」、「テキストの主題・思想にかかわって読者側の思想や経験が参入する〈対話〉を促す側面から検討した問い」それぞれにおいて異なる交流の様相が確認された。

読みの方略の使用に関する調査では、自由記述式アンケートの分析から読みの方略の要素として「読む対象：何を読むか」、「読む手続き：どのように読むか」、「読む態度」の三点を抽出した。

実践調査Ⅱでは、メタ認知的変容としての読みの方略の獲得・変容の過程を問いの性質ごとに検討し、読前と読後のアンケート調査結果の比較・分析を行い、読みの方略の使用実態を明らかにすることを目的とした。その結果、読みの交流により読みの方略は獲得・変容し、その過程により読みの交流の様相は異なることが示唆された。また、読前、読後それぞれの読みの方略に関する自由記述アンケート調査の結果から読みの交流学習活動は、読み手に読みの方略を意識付け、その結果、読み手に読みの方略の取捨選択を促し、読み手が用いる読みの方略の要素は多様化する傾向が認められた。

4 研究の考察

第一に、読みの交流を対象とした先行研究の文献調査から、読みの交流における学習形態は、「個人→グループ→全体」を基本として、読みの形成過程を分節化することにより、読み手が自身の読みをメタ的に捉えることの有効性を明らかにした。さらに、ワークシートを学習形態に即した構成にすることにより、読み手が読みの交流における読みの形成過程をモニタリングすることが可能となり、自身の読みを効果的に他者と交流することが可能となる。

第二に、具体的な実践場面を対象として読みの交流の様相を記述することにより、教室空間で学習者がどのように読みの交流を行っているのか、その一端を明らかにした点にある。特に認知的変容としての解釈の変容、メタ認知的変容としての読みの方略の獲得・変容に焦点を絞ることにより、問いの性質と交流の動的な過程を明らかにした。その結果、問いが学習者に喚起する読みの方略は単一の方向性をもったものではなく多様であり、さらに同じ読みの方略を用いてもテキストの表象化の過程において既に差異が生じており、異なる読みを形成している可能性が示唆された。

第三に、実践者である教師が読みの交流における学習者の読みの形成過程を観察可能にするという点である。学習形態を「個人→グループ→全体」を基本とし、ワークシートの構成を学習形態に即したものとすることにより、読みの形成過程を分節化することが可能となる。学習活動の成果を量的に把握する定期考査等のテストでは、測定が難しい読みが形成される動的な過程をワークシートの記述内容から質的に捉えることにより、学習者が自立した読み手を目指して自身の読む力を育てていく姿を多面的に評価することが可能になると考える。

5 今後の展望

本研究の成果を踏まえ、学習課題としての問いの性質の差異と読みの方略の獲得・変容の様相について、実践を重ね、精緻化していく。さらに、読みの交流が対象とする具体的なテキストの文種による交流の様相の差異についても実践を重ね、明らかにしていく。